3月號

婦人運動

第5巻第3號



職業婦人社發行

三月號婦人運動 第五卷第三號 目次

過渡期と云ふ事

過渡期の現代である。過渡期が過渡期でなくなるのは何時のことか、今の過渡期がなくなつたときそこには新しい過渡期があるのではないか。そして人類の究極理想を實現しうるまでは連續する過渡期ではないのかとも云へる。

しかしそれはこゝでの問題ではない。過渡期の現代と云ふ意味でも見方や考方はいくらにでも分かれる。だがわれ〳〵の意味する所は主として經濟組織のそれである。そしてそれは今過渡期にある。轉換期と云つてもいい。

過渡期こそは重大である。過渡期とは上汐時の水が上と下とで交流する狀態であると比喩しうる。そこには假象と眞相との混在がある。それだけに社會相を正確に見極めるためには冷靜と沈着とを要する。所が遺憾なことには過渡期の時代は過渡期特有の浮遊物を選擇する。浮遊的存在が先驅者であり、前衛分子であるかの如き外觀を呈する。過渡期にたいして冷靜を要するのはその點である。過渡期は特に雷同性をあまやかす。日本人と日本婦人とは無條件に雷同を愛する癖がある。鸚哥に鸚哥が共鳴しても、それは零に零を加へることであるに過ぎない。過渡期に沈着が必要だと云ふのはそこである。

表面の道化者の喧騷を無視して、ほんとうに力ある流れは默々として流れて行く。過渡期の歩みは默々たるその力の流れを理解してそれと歩調を合すより外はない。

過渡期と云ふことをよく考へてみる必要があると思ふ。

（新居　格）

政治の經濟的基礎（一）

——我國無産政黨の將來——

辰巳經世

一　緒論

『太陽の下新しきものなし』との定言は、自然科學的に見て、即ち自然現象を説明する場合には、或は拒むことのできぬ眞理であるかも知れぬ。然しながら、社會科學の原野に於ては、即ち社會現象を理解しようとする場合には、全然妥當しないといふことも亦否定できぬ事實である。

具體的に言へば、吾々が普通社會現象と呼んでゐるところの法律、政治、經濟、宗教、道德等は、何れもその形式から言つても、内容に就て見ても、時と所とに從つてそれぞれ相異するのである。例へば日本の法律と英國の法律とは種々の點で互に異つた形式と内容とを有つてゐる。又同じ日本に於ても、昔行はれた法律と現今行は

れてゐる法律との間には、隨分大きな違ひがあるのである。このことは單り法律ばかりでなく、政治にしても、經濟にしても、或は宗教、道徳等にしても同樣である。

然らば、何故社會現象が、かくの如く時と所との異るに從つて相違するか、換言すれば、何が社會變動の眞の原因であるかといふことは、啻に社會科學の專門の學徒に取つてばかりでなく、一般人類に取つて最も興味のある問題でなければならないのである。何故かと言ふと、吾々は社會變動の原因を明かに認識することに依つて、過去に於て何が吾々の社會を動かしたか又現に何が吾々の社會を動かしてゐるかといふことを正しく理解することができるばかりでなく、更に將來吾々の社會がどんな風に變つて行くかといふことに就て正しい判斷を下すことができることになる譯だからである。

かういふ譯で、社會變動の眞の原因が何であるかといふことを明かに識りたいといふ慾求は、隨分古くから人類の心の中にあつたと見えて、遠くギリシヤの昔から、この點に就ての種々の意見が提供せられてゐる。例へば社會が移り變るのは神や佛の思召によるのであるとか、英雄や偉人が時々現れて世の中の事情を變へて行くのであるとか、政治の組織の變動に從つて社會現象の一切が變動するのであるとか、人間それ自身の裡に在る正義觀念の消長が、社會の進化又は退化を導き出すのであるとか、隨分色々な見解が古くからあり、又現在も主張されてゐるのである。ところが、今一々詳しく述べることは本稿の目的でないから略するが、これらの見解は何れも皆それぞれ缺陷を有つてゐて、社會現象を說明するのに充分ではないのである。かくの如き色んな見解が、色んな人々に依つて主張せられ、而もその何れもが社會現象を正しく理解する上に於て大して役に立たない時に當り、この問題の上に一つの大きな強い光りを投げてくれたのは、今から六七十年前から唱へられ出したカール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルス等の見解で、普通唯物史觀或は經濟的歷史觀と呼ばれてゐるところの學說である。

唯物史觀が何を意味するかといふことに就て、詳しい專門的な說明をすることも今の私の目的ではないが、簡單に言つて見れば、吾々の社會の基礎をなしてゐるものは經濟であつて、この經濟といふ基礎の上に、法律とか政治とか、道德とか、宗敎といふやうな所謂上部構造が立つてゐるのである。從つてこの經濟といふ基礎の變動に從つて、その上に立つてゐる色々の建物も亦變動して行く、即ち極く大ざつぱに言へば、社會變動の眞の原因は經濟の變動であるといふのである。尙ほもつとよく判るやうに說明しようと思へば、ここに所謂經濟が何を意味するか、又その經濟自身がどうして變動するかといふやうな點に論及しなければならぬわけであるが、それは他の機會に讓る。たゞ、淺薄な人たちが動もすると言ふやうに、『唯物史觀とは、人間の高尙な精神の働きを蔑視して、何でもかでも物質即ち金錢でかたづけやうとする我利々々亡者の囈言』でないといふことだけを明かにするためには、以上述べただけで充分であると思ふ。而して本稿では、專らこの唯物史觀的立場から、社會の政治的變遷過程を說明し、現に吾々に取つて最大限度の興味の中心である我國無產政黨の將來に就て、何らかの判斷を試みようとするのが私の目的である。

二　政治の經濟的基礎

今の內閣總理大臣若槻禮次郎氏が初めてその職に就いた時に色々な抱負を發表されたのが當時の新聞に揭げられてあつたが、その中特に私の記憶に殘つてゐるのは、『政治は力であるといふのは間違で、政治は正義でなければならぬ』といふ意味のことを力說して居られたことである。私の友人の或者はその新聞を讀んで來て、大層感心して『流石は若槻さんだ、曾て如何なる政治家も言ひ得なかつたこと――實は誰もがさう言つてゐる――を堂々と喝破してゐる云々』と言ひ、新聞紙も多くこの抱負に贊同して、『願はくばこの抱負に基いて實際政治の衝に當られんことを』などと激勵の論說を揭げてゐたやうである。若槻さんのこの言葉は、成る程政治家のステート

メントとしては立派なものであり、堂々たるものである。私の友人を感心させ、新聞の賛成を得ただけでも、如何にその效果が大であつたかを知ることができる譯である。然しながら、冷かな科學的眼孔から見れば、要するに政治家のお題目に過ぎないものであつて、實際の政治そのものに就ては何事をも說明しない空文句に過ぎないのである。何故かと言ふと、過去幾千年に亘る人類の歷史は未だ曾て正義の上に築かれた政治のあつたことを示さず、現今に於ても尙ほ力の上に築かれない政治はないのである。卽ち若槻さんがどんなにそれをお嫌ひになるにしても政治は常に力の上にのみ可能であり、世間の人がどんなに賛成するにしても實際政治の基礎は決して正義ではないのである。

　假に政治家の或者が、例へば若槻さんが、彼自身正義と信じてゐるところに從つて政治を行つてゐるとしてもこの正義なるものは、極めて不確定な內容をしか有しないものである。正義も亦それ自身絕對の存在ではない。時や所を超越して妥當する普遍的な正義といふものは決してないのである。例へば人を殺さぬ事、僞を言はぬ事、老人をいたはること、子供を大事にすることなどは、一寸考へると何時の時代にも如何なる社會に於ても例外なく正義觀念に一致するやうに見える。然しどこの國でも戰爭で敵を殺すことは不正義でない。外交官や商人は自分の國の利益のため或は自分の店の儲けのために色々の駈引をやる。卽ち僞を巧みに言ふのが普通であるが、これ又決して不正義とは考へられてゐないのである。又かの姨捨山の名に殘つてゐるやうに、老人をいたはる代りにこれを山へ捨てることが、我國でも或地方或時代に於ては正義の觀念に反することではなく、スパルタの國では虛弱な子供は長官の命令で溪間へ捨てられたのである。かくの如く或時代に於て正義であることが必ずしも他の時代に於ても同樣に正義であり得る譯のものでなく、或人に取つて正義であることも他の或人に取つては必ずしも同樣に正義ではない。殊に原始時代に於けるが如く、極く少數の同一血族に屬する者のみが小さい一社會を形つてゐた時代はいざ知らず、社會が互に利害を異にする異つた階級の對立から成つてゐることが明白なる事實

である以上、少くともこの何れの階級にも妥當する政治的正義は絶對にあり得ないのである。

よく『正義の勝利』と言ふが、實は『正義の勝利ではなくて勝利の正義である』正義だから勝つのではなくて勝つたから正義なのである。何らかの意味で相爭ふ二つの集團は何れの方も自分は正しく相手方は正しくないと信じてゐる。例へば徳川と豊臣との爭の如きも、豊臣方には豊臣方としての正義があつた。けれども徳川方が力に於て優つてゐたために、豊臣方が敗北し、その殘黨は不正に組したものとして見つけ次第處刑されたのである。又幕末維新の際に色んな勤王の志士が、それぞれ自分の正義を翳して徳川幕府を倒すために活躍したのであるが、然し彼らの正義は幕府の方から見ると不正義であり、從つて彼らの力が足らなかつた間は動もすると捕へられて牢獄に打ち込まれたり、首を切られたりしたのである。ただ後に到つて勤王方の力が優り、幕府が顚覆して初めて彼らの正義は正義として一般に認められ得たのである。かくの如く考へて行くと、今日社會運動が翳す正義も、今でこそ力及ばずして蹂躪せられてゐるが、軈てその力が強大な力で支へられ、一般に正義として認められる時が絶對に來ないと誰が斷言し得やう。

それは兎も角、正義はかくの如く絶對的のものでなく相對的のものである。而して或正義が正義であり得るのは、少くとも政治的權力の基礎となるところの正義であり得るのは、その正義を支へるところの力があるからである。卽ち若槻さんが言はれるやうに、政治の基礎が正義であるのでは決してなく、反對に力こそ政治の基礎である。若くは正義が政治の基礎であるかの如く見える場合でも、その正義を支へる力があつて初めてそれが可能なのである。ところが、更に吟味を要することは、ここに所謂力とは何であるかといふことであるが、私共の見るところを以てすれば、この力こそ實に經濟的力である。少くとも經濟を支配し得るところの力のみが政治上の權力の基礎となり得るのである。（未完）

―（一九二七、二、四）―

わが婦人運動の進むべき道

―婦人は、無産政黨を援けよ、これに提案せよ、監視せよ―

奥むめお

二月十六日、衆議院を傍聽してみたいといふ或る讀者からの依頼をうけて、私は傍聽券を手に入れるために衆議院に出かけてゆきました。私にとつては實に六年振りの議院訪問でありました。『ホウお珍しいことですなあ』と、私を見て話しかけてくれる見知り越しの新聞記者や受付子もありました。

丁度、三黨首の申合せに對して清瀬一郎氏の質問があるとかで開院まもなく滿員の札が立てられて、婦人傍聽席まで溢れて入られない人が數人ありました。私は五六年前政治運動に沒頭してゐた時分に、婦人側の氣勢をあげるためにも、婦人の政治的自覺を促すためにも一人でも多く婦人の傍聽者を驅り出したいものと、非常に骨を折つた時分の事を思うて、いろ〳〵感慨に堪へないものがありました。

私たちが新婦人協會に依つて治安警察法第五條改正のための運動を初めたのは大正八年であります。この治警運動のことに就いては旣によく知られてゐる事と思ひますが、治安警察法の第五條で、女は、未成年者と共に政事問題に關する演說會を傍聽する事も、自分で政談演說をする事も一切禁ぜられてをりました。この法案は新婦人協會の運動の結果大正十一年に修正されて、婦人參政權運動の第一の關門はその日から開かれたわけでありますが、今日なほ第二の關門として、私たち婦人の政治的行手を妨げてゐる、女子は政治結社に加入することを得ず、といふ一項があるのであります。

婦人は政治結社に入ることが出來ないといふ事は、婦人參政權運動の前途に橫はる實に大きな障碍であります。婦人の運動はまづ、この惡法治安警察法第五條(第五項)を取除くことに集注されなければなりません。たゞに、この法文が參政權運動の障碍であるばかりでない、全ての婦人運動の進展を阻止する、障碍であります。何故なら、近頃國際的に喧しい問題になつてゐる婦人勞働者の夜業問題でも、坑婦の問題で

も、公娼の問題でも、職業婦人の問題でも、母性保護兒童保護の問題でも、又、男女不平等の法律を改正するためにも、全て、その解決のためには婦人の有力な政治運動を起さなくては結局駄目なのですのに、それが出來ないからであります。

新興の無產政黨は今日四つに分かれてそれ〳〵他黨の排擊に浮身をやつしてゐますが、これは私たち婦人として、既成政黨の泥試合を見る以上の痛心事でありますが（たとへそれ〳〵にもつともな云ひ分があるとしても）然し、無產政黨が何れも、社會民衆黨でも、日本勞農黨でも、勞農黨でも、日本農民黨でも、みな、無產階級の利益を擁護して立つてゐると云ふ點で、（中には眞に無產政黨とみるには異論のあるやうなのもありますが）そして、『被支配者として我々も、君たち女も同じ樣に長い間支配階級から勝手に壓迫されて來たのだ』といふ共同の立場から、私たち婦人の問題をも自分の問題としてまじめに取扱つてくれてゐる點では同じです。殊に憲政會にしろ、政友會にしろ、本黨にしろ、何れも既成政黨が婦人の問題に對してまるで支配者の立場から上から臨み、たとへ婦人に關する問題を取扱ふ場合があるとしても、何らかためにする所あつての利用に供する以外には決して誠意を以てやつてくれるものでないのとは、まことに恰好の對象をしてゐる事に私たちは氣附かねばならないと思ひます。

大正八年から十一年まで（治警運動が成功したときに私は退きました）政治運動に沒頭して來て私は何を敎へられたか。既成政黨の賴むに足りないといふこと、自分たちの利權を追求する事の外そこに社會的正義もない、國民の生活もない、むろん婦人問題などある筈はないのだといふ事でありました。私たちの治警運動でさへ、時代の輿論が立派に、この當然すぎる程當然の婦人の要求に味方してくれてゐた以外婦人の熱心な運動があつたためにその實現の時期を早めた事は云ふまでもなかつたであらうが、然し當事者であつた私としては、あの場合政友會憲政會國民黨間の人氣取政策のための奪ひ合ひの具となつてうま〳〵漁夫の利を占めたものであることを否定する事が出來ないのであります。（初めの內强硬に反對を續けてゐた政友會が、今度は他黨を出し拔いて私たちの治警案を提出して、ズル〳〵と通過させてしまつたのです）

扨、各無產政黨がまじめに婦人問題を取扱つてゐるといふ點では、私たちも普通選擧法の實施に依つて今度新らたに有權者となつた一千萬の男子と共に、無產政黨の將來に多大な期待をかけてゐる者でありますが、然し、本誌の一月號に各無產政黨から寄せて貰つた對婦人問題に關する態度を讀んで

も、又、各黨の要路の人々に會つていろ〳〵婦人の問題に就いてその具體案を叩いてみても、婦人としての私にあきたらない一點は、等しく自分の問題として婦人に關する諸問題を考へてゐるのではあるけれど、そしてその政策に掲げてゐるものも、

婦人參政權（普通選擧制の徹底）
公法上及私法上に於ける差別の撤廢
婦人の深夜業坑內勞働及び危險作業の禁止
女子人身賣買の禁止

等々きはめて實際的な當面の問題ばかりを取りあげてゐるのではあるが、その態度が可なりに抽象的であり、概念的であるといふことであります。

私は痛切にさう思ひました。婦人の問題は結局婦人がやつてゆくより外ない。無產政黨がまじめに私たち婦人の問題を取扱つてゐてくれるとは云ふものゝ、その態度はまことに抽象的なものである。あの政策に擧げられてゐる一つ〳〵に就いてみても、それに血を通はし肉をつけて生かすものは結局私たち婦人でなければならない、と！

殊に現在のやうに、婦人が未だ治安警察法に依つて直接政黨の內部から働いてゆくことを禁ぜられてをり、いはゆる一票を持たず、即ち選擧權被選擧權を拒まれてゐる限り、無產政黨の內ででも、婦人の問題はとかく、當面焦眉の利害問題その他のために後廻しにされ或ひは置忘れられるやうな場合がないと誰が保證出來ませう。（また左翼の或る一部では、男子側の觀念的、抽象的な婦人論が、婦人たちの、ほんとうの自分自身の生活をつきつめて考へさせるのに必要な眼を、反つて結果に於て妨げてゐると思ひます。）さういふ意味からも私は、婦人は外から（內部から動かしてゆく事が出來ない代りに）無產政黨の發展のために力を藉すばかりでなく、特に婦人の立場から無產政黨を勵まし、これに提案し、又絕えず監視さへしてゐなければならないと思ふのであります。

折も折、議會訪問運動に依つて僅かにその存在を認められてゐる婦人參政の諸團體では、今年もまた（無產政黨の出現をも知らぬげに！）燕樂軒に代議士を招待し、議院に叩頭嘆願の日をくりかへしつゝ徒らに、婦人に參政權を與へよ、と叫んでゐます。

この時に際して私たちは、手を拱いて全てをなるが儘にまかせておいていゝでせうか。よし、從來の婦人運動がとかく有閑階級婦人の單なるお題目並べに終つてしまふ事が多かつたとしても、今後の婦人運動も又さういふ婦人たちだけに委

せておいていゝといふ事のあらう筈はなく、勿論、だからさういふ婦人たちの仲間入りをして惜しい時間と金子と精力とをすりへらすのは馬鹿々々しいと云つて、獨り己れを清うして納まつてゐる事は許されない筈であります。否！ 在來の婦人運動にさういふ恨みが多分に孕まれてゐただけに一層ほんとうの婦人運動が、――從來の色々な婦人運動にしたところで、それがほんとうのものでなかつた、ウソのものであつたといふのではないのですけれど、とにかく有閑婦人たちがあり餘る餘暇から、その豐富な知識から編み出して來る題目は、とかく机上の捏ねものであり易く、從つて私たち婦人の實際生活とは遠く離れた抽象的なものに知らず〳〵の内にもなり勝ちだつたのであります。

一般の婦人が、比較的知識程度が低いといふ事や、その生活に餘裕がないといふ事らのために、わが婦人運動が極く少數のめぐまれた知識階級婦人有閑階級婦人たちに壟斷せられてゐたといふ事は（極く少數の元氣ある無產階級婦人が出ても、いろ〳〵の理由から次第に淘汰されてしまつた）ますます婦人大衆の生活とは關りの少ない女權運動慈善運動賣名運動に大抵の婦人運動を傾かせてしまつた、と私は斷言出來ると思ひます。

然し私は信ずるのです。

將來の婦人運動が取上げるたつた一つの題目も、全ては血のにぢみ出るやうな私たちの生活をその裏付けにしたものでなくてはならないと『私の生活がさう要求する！』夜業禁止の運動でも、公娼廢止でも、母性保護でも、職業婦人勞働人の一般問題でも、全て、その人たちの生活を通して生活そのものから湧き上つて來た欲求であつて、初めてそこにほんとうの力も熱も湧いて來るでありませう。いたづらに抽象的なお題目をかつぎまはつてゐたいはゆる婦人運動に呪あれ！

新しい、ほんとうの婦人運動は、私たち婦人の生活からこみあげて來るやうな根強い力として、今にこれまで全く無視されてゐた新しい地盤から湧上つて來るでありませう。



婦人問題小感

今野賢三

一、政治と女性

進步的な女性諸君が、それ〴〵の主張と立場から、參政問題を中心に、一つの大きな團體をつくつて、その目的のためにのみ、共同戰線を張つてゆくといふことは、必要なことであり、もし、今實現してゐるとすれば遲きにすぎたものであらう。しかし、婦人運動に從事してゐる女性諸君は、それ〴〵の主張と立場をもつてゐるかぎり、同じ參政問題でいつしよになるとしても、それはその運動方法の上において、立場を異にしたところからくる溶合が、まことに困難であらうことが想像される。いや、溶合が不可能でさへあるかも知れない。まして、かう見渡したところ、同じ參政權の主張にしても、まつたくの自由主義的な立場から來てゐるものもあるであらうし、また、經濟上の獨立を得ない理由を政治的にむすびつけて參加してくるものもあらうし、また、あくまでも純階級的な立場から來てゐるものもあらうしするから、純階級的立場と、ブルジョア自由主義的立場は、その運動方法においての溶合が、不可能でさへあるかも知れない。その信念にいたつては、思想的內容からくるところの、水と火にひとしい、背中合せなものを持つてゐるからである。

それにもかゝわらず、溶合し、共同戰線を張つてゆくとすれば、それに必要なことは共同戰線といふものゝ、明確な認識でなければならない。

共同戰線に、絕對に必要なことは、感情的な一切のものを排することである。そのために、各自の自己反省をどのくらゐ必要とするか知れない。その自己反省のうちの、第一にお

かなければならないことは、女性の特殊性を意識することである。第二には、自己を或る程度ころして、冷靜な理論的であることのひろい、大きい抱擁力である。清濁あはせ呑んで一つの目的へすゝむといつた氣持である。

次には、現實の洞察力の、政界の裏に徹する深さである。それにもまして重要であらう團體行動としての忍耐と鐵のやうな意志である。

二　女性啓蒙時代

現在日本の、婦人運動に熱心なる、婦人諸君は、それ自身の立場から、同じ女同胞の啓蒙運動に、何故もつと眼をそゝいでくれないのだらうか？

一群の、それも曉天の星のやうな、知識階級の自覺があつたところで、大衆の、無智な存在を此のまゝにしておいていゝといふわけはない。しかも、その曉天の星のやうな、知識階級でさへもが、そのかげに男性の指導を要する現狀でさへあるではないか。だがいふであらう。『大衆の啓蒙運動に此のとほり努力してゐるではないか』と。それは認めてゐるけれども、低い、一般大衆にうけいれられるやうな、どの程度のはたらきかけをしてゐるかといふことになれば、私は不滿を表明せずにゐられない。

第一に、婦人大衆の、實體をにぎるため、思索し、檢討してゐないといふことは、婦人運動の缺陷でなければならない。

第二に、男性が討究した、しかも概念的な理論のみを持つて考へて、その理論を生み出してゐる事實について、つまり社會生活の現實について、その深さや裏の裏を究め、知らうとしてゐない。私のいふ社會生活の現實といふのは、此の世の、資本主義的からくりが、女性の生活の、どんな部分にまでも及ぼしてゐるといふ認識をいふのだ。その認識と同時に、そのからくりの中で、女性がどんな意識形態を持つてゐるか、これを心理的に、分析し、解剖することに依つて、大衆の、生活心理を透した實體をつかみ得るといふのだ。

その實體をしつかと握りしめて居ずに、啓蒙をやらうとしても喰ひちがひが生ずる。そして、實體がつかみ得た時に、婦人大衆の共通した缺陷について、先づ何よりも大きな眼を睜らなければならないだらうと思ふ。そして、その缺陷から脫却させて、新な性格を築かせてゆくことに如何に努力しな

ければならないであらう。

婦人大衆を、社會の階級的認識をあたへるために、先づ、その奴隷觀念からすくへ！奴隷を美化する封建的精神から脱却させよ。取引と同じやうに、物！として取扱はれることから反逆させよ。物！とならずにゐられない資本主義經濟組織を、わかりよく、わかりよく、その胸に徹するやうに吹き込め。その性格的缺陷、衝動的にのみ行爲を決定する本質、情緒的な生活觀、意志を無視すること、論理的に行爲し得ないといふこと……等々の、消極的な個人意識を、人間としての意識へ、社會の一員としての意識へ、ひきあげるあらゆる努力を必要とする。

婦人解放へ行くみちは、現社會の、經濟的な變革をほかにしては不可能である。それにつけても今や、啓蒙に全力をそゝぐべきときでなければならない。

―生活斷想―

平田のぶ

人間性の偉大さ

自己現在の不幸を現在の自己丈でなく、遠く祖先に、永く子孫に迄考へ及ぼす所に其人の深さがある。

自己現在の苦惱を通し全人類の苦惱を感ずる處に其人の廣さがある。

隣人の涙を他人事と見過せず共に涙を溶け合はす處に其人の尊さがある。

自己の生命を通して宇宙の生命を感ずる所に其人の高さがある。

改造

人類の改造は個人改造を外にしては望めない。

社會改造は家庭生活の改造を外にしてはあり得ない。

社會運動

生活に根ざさぬ主張に呪あれ。

蜀の粟

飢えても蜀の粟は食べたくない。
だが石は遂にパンにならなんだ。
パンにならぬ石をかぢつても腹はくちくならなんだ。
だが、蜀の粟は食べたくない。
これが節操持つ者の惱み。

或る職業婦人の手紙

君島まさ子

突然、こうしたぶしつけな手紙を差上げる事の失禮を幾重にも御許し下さいまし。非常に御多忙でいらつしやると云ふ事を陰ながら承つて居りますので幾度か書きかけては止め、書きかけては止めて躊躇してゐたのでありますが、思ひきつて書きつづりました。

私は貧しい家庭に生れたと云ふ事の爲めに、僅かに小學の教育をうけただけで、此世の中へほりだされて、いろ〳〵な苦しい境遇をへて、只今では或役所に務めてゐる者でありますが、次第に年が行くにつれ、苦しい過去を思ふにつけ、自分の周圍を見る眼が開かれて行くにつれて、女として與へられたありきたりの生活にそのまゝは入つて行く事が出來なくなつたのであります

朝から晩まで役所の事務室で、ただ機械のやうに働いて行く、それは貧しい者にとつては仕方のない事かも知れませんが、何故、どうして、こんなに何の感激もない世界しか、私達には無いのでせうか。と云つて、たゞその生活を保證されると云ふだけで、書物を讀む事も、考へることも、世の中の出來事を判斷する事も許されないやうな家庭婦人としての生活に入つて行く事も私にはどうしても出來ないのであります。

私は私達の眼を開いて與れる書物を讀みたい、自分と云ふものを、社會と云ふものを考へたり判斷したりする事の出來るやうに、自分を養て行きたい。もつと生き甲斐のある生活には入つて行きたい。さうした心持で一ぱいになつてゐます。夜もひるもそれを考へない時と云つてはありません。

が、貧しい教養しかない私には何を讀み何をどう云ふ風に考へ、どうして自分の生活に光明を見出していゝか、心の中ではいくらもがいて見ても、自分獨りではどうする事も出來ないのであります。と云つて、私の周圍にそんな事を云つても本氣で聞いてくれさうな人は一人もありません。同じやうに役所に務めてゐる女の人達は、たゞ〳〵ひまがあれば御化粧の話や、着物の品定めやら人の噂さにその日を暮してゐる有様で、又男の人達は、たゞ面白い可笑しい話なれば兎角、私のやうなものゝこうした望を云つたならば、腹をかゝへて吹き出しさうな人ばかりでなのです。

本氣で話し合ふ人もなく、勉強しやうにも導いてくれる人もなく、たゞ機械のやうにあくせくと働いて老いて行く、私は思つただけで胸がいたくなる樣な氣持がします。

私のやうなものには、こうした生活以外に、どうしやうもないのでしやうか、私はあきらめやうにもあきらめられない氣持を誰かにぶちまけて御尋ねしたいと永い間思ひ續けて居りました折柄、丁度先日或期會に、あなた様の雜誌を見せて頂いて日頃の弱い氣持に鞭打つて、誠にあつかましい御願ひですが、御教へを乞ふ次第であります。

思ふことさへも御傳へする事の出來ないたど〳〵しい筆で、さぞ御解りにくい事と存じますが、萬一御ひまな折に御返事がいたゞけるやうでしたら、どんなにうれしい事でありませう。

黒土の解けた日

田尻久子

私は午後の日に踊り出た。
おゝ、高原の春！
黒土は解けたのだ。

私は小舎に行つて鋤とがんづめを持つて來た。
私は隅から隅から黒土をかへした。
草の葉が新しい芽を
軟かい解けたこの黒土の中に用意してゐた。

私は堀つた、ぐんぐんかへした。
草の香がぷんと鼻をついた。

私は土をおこした。
ぐんぐんおこした。
私の血は音をたてゝ流れた。

私は堀つた。ぐんぐん堀つた。
日が丘の端にかたむくまで、
そして私のからだがたるむまで、
午後の日に、
私はがんづめを手にして踊つた。

優生運動の意味と目的

池田林儀



◇

「優生運動もいゝが、優生者ばかりが結婚しなければならぬとすると、劣生者は一體どうすればよいのです。劣生者だつて人間である以上、本能的性慾をもつております」と恐ろしい權幕で苦情を申し立てゝ來る者があります。私はいつも斯うゆう野暮な人があるから、優生運動の必要があるのだと申しております。優生運動は決して結婚の問題ばかりを考えているのではありません。また、優生運動は、未だ嘗て劣生者の結婚を禁止したこともなければ、劣生者の結婚に反對したこともありません。人間と生れて來た以上は、優生者であらうと劣生者であらうと、どなたでも自由に結婚して下さい。性慾生活を御自由に心ゆくばかり享樂して下さい。優生運動は決して人間自然の本能を抑壓するような、野暮なことは致しませぬ。と、私は斯う申しております。

◇

「それでは優生運動にならんではないか」と突つ込んで來る人があります。それに對して私は斯う答へます。いやしくも人間の自由を强調し、本能を口にし、人權を主張し、戀愛を讃美し、性慾を禮讃し、人間生活の神聖を說くほどの人であるならば、少くとも物の道理はわかる筈である。それ位の人

ならば、自分が遺傳的缺陷を持つているか否か、劣生素質を持つているか否か、自分の生む子供が不幸を負うて生れて來ぬか否か、とゆう位の分別はある筈である。戀愛を讃美して假りに劣生者と結婚するようなことがある場合、もし自分たちの生む子供が、不幸なる遺傳を持つて生れて來ると知つたなら、寧ろ初めから制産手術なり、避妊法なりを講じて、そうゆう子供を生きないようにする方が、自分たちのためでもあり、子供のためでもあり、國家社會のためでもあるのではないか。これは理性あり知識あり分別ある文化人の當然考えなければならないことではないでしようか。

◇

以上は理知ある文化人に向つてゆうのですが、この社會には不幸にして、斯うした理解も分別もない、知識の淺い人が少くありません。そうゆう人たちに向つては、このお互の協同生活をなしている社會の指導的地位に立つ人々が、出來るだけの方法を講じて、遺傳的缺陷者の子孫を遺さないようにしてやるのが、當然のことではないでしようか。それには法律規定を必要とするものもあり、國家的設備を必要とするものもあり、そこに優生運動の實際的必要が生じて來るのであります。

◇

以上は性慾を中心として言つておるのですが、優生運動といへば、直ぐにもう性慾問題ばかりを連想し、結婚第一主義になり勝ちなのです。優生運動は、その理想からいへば、優生者同士の結婚をすゝめ、精神體格を改良し、心身の權衡を得た、趣味性の豐富な人間を作るにあるのですが、そうゆう人間ばかりを作つても、そうゆう人間が集まつて協同の生活をする社會そのものが秩序なく、衛生的でない場合には、何にもならないのであります。水晶やルビーやダイヤモンドをいくら轉がしてあつても、それが室内の裝飾にもならなければ室内の規律にもならないのです。これを周圍環境に應じてよく配置することによつて室内の美觀と秩序とが成り立つのであります。

◇

人間社會もいゝ人間ばかりを生み落しても、決していゝ社會にはならないのであります。そのいゝ人間が、その居るべきところに居り就くべき職務につき、規律と秩序とが得られなければなりません。ルビーやダイヤモンドには生命がない

からおしつけて置いたところに安居しておるけれども、人間には生命があり手足があるから動く。これを放縱我儘に動かないようにするには、人間としての義務職分道德を自分でよく理解するように教育しなければなりません。

いくら質のいゝダイヤモンドでも、これを磨かなければ光は出ません。いくら優生學的に優生な人間が結婚をして、よい子供を生んだとしても、これを教育しなければよい人間にはなりません。それで、優生運動は、よい子供を生むことばかりを考えては居られないのであります。どうしても、生み落した子供を教育することを考える必要に迫られるのであります。

◇

まことに斷片的ではありますが、以上申上げたところによつて、優生運動の大體の精神はおわかりになることゝ思ひます、卽ち、優生運動は、

第一に、出來るだけ遺傳素質に缺陷のない人同士が結婚をして、よい子供を生むようにすること。

第二に、質のよい鐵をえらんで、よい刀鍛冶が銘刀を鍛え上げるように、よい子供たちを、出來るだけよい

教師がよく教育すること。

第三に、名刀もそれを入れる鞘が惡ければさびてしまうように、よい人間もこれを入れる社會が惡いと、折角の人物が代なしになるから、社會そのものを出來るだけよい社會にしておくこと。

この三つのことに努力するのであります。卽ち、よい兩親、よい教育、よい社會、の三拍子を揃えることが、優生運動の理想なのであります。今、さらに、優生運動の行わんとするところを、分り易くするために、簡單に表にして示しますと左の通りであります。

- 優生運動
  - よい兩親（よい種子）
    - よい結婚（出來るだけ心身に遺傳的缺陷のない人々の結婚）
    - 健康診斷
    - 婚姻に關する法
    - 血統の調査
    - 姙娠調節
    - 制産手術
  - 憲法の民衆化

魂あり精神あり生命ある人間として、その健康にして平和幸福なる生活の實現に努力しようとするものであります。

◇

私のこゝに述べましたところは、抽象的なところが多く、實際的な具體的なところに觸れた點は極めて少いのでありますが、差當つて優生運動とゆうものゝ意義と目的とを説明しておきたいと思いまして、こんなことを述べて見たのであります。

優生運動の目的は高遠にして、その實現が甚だ困難なように見えますけれども、私は決してそうは思はないのであります。今でこそ、優生運動とゆう言葉も意味も未だ理解されてはおりませんけれども、今後二三十年の間には、この運動は當然過ぎる民族運動として、この社會に消化されてしもうものであると信ずるのであります。私はこの運動が一つの運動として存在する間は、未だその實蹟の擧らない證據であると思うのであります。

- よい社會（よい畑）
  - 愛國精神の鼓吹
    - 皇室の尊重
    - 傳説民謠の振興
    - 國史の消化
    - 日章旗の顯揚
  - 議會の改革
    - 選擧の革新
    - 國民豫算の理解
    - 婦人參政
  - 自治制の刷新
    - 知事公選
    - 郷土偉人の顯揚
    - 選擧の公正
    - 團體的訓練
  - 保健衛生
    - 社會病の撲滅
    - 花柳病傳染病の豫防撲滅
    - 衛生設備の完成
    - 體育スポーツの奬勵
    - 賣藥の合理的應用
- よい敎育（よい手入）
  - 師範敎育の改善
  - 敎師の生活改善
  - 社會敎育機關の組織的運用
  - 敎科書の改善

右の表は甚だ簡單であるけれども、優生運動の大體如何なるものであるかとゆうことは、一見して推察することが出來ると思います。これまで『人種改良學』として知られていた優生運動は果物野菜の改良のような交配を主とした運動であると考えられていたのであるけれども、今日私どもの唱えておる優生運動は決して人間を『物』として取扱うものではなく、

東京共働社物語

廣田金一

一月二十三日の夜消費組合東京共働社の樓上で第五回の總會が行はれた。さしもに廣いあの階上がギツシリと人の顔で埋められた。算へてみると實に百七十六人、そして、外のどこの組合でもみることの出來ぬ異觀は、四十五十をすぎたらしいおばさん達やら、赤坊づれのおかみさんたちが組合員として熱心に集つて來てゐたことである。

この東京共働社は、今日では日本全國を通じて數へれば餘程澤山に有る消費組合、購買會と云つた風のものの中で一番目ざましい發展をとげてゐるものである。會員相互が、とにかく自分たちの組合だ、おれの店だ、と云つた風の氣持で、忙しいときには手傳つてもくれるし、會員同志で勝手にお茶をいれて飲んでゆく。萬事その調子で組合と組合員との關係も非常に親密であるし、いはゆる井戸ばた會議で宣傳がされるのか云ひ傳へ聞き傳へして婦人たちが、ごし〳〵物を買ひに來て、やがてまもなく組合員にもなるのである。（廣田さん曰く、女の口といふものは餘程宣傳力をもつてゐる者ですなあ）

然しこれだけに發展させるまでには、組合長廣田氏はじめみなさんのいいいなみ〳〵ならぬ苦闘惡戰の實に長い年月がつみ重ねられてゐる。次は、廣田さんの過去六年にわたる苦しかつた思ひ出語りである。近い將來にはどうしても直接消費生活をその主なる生活としてゐる婦人の力が、この消費組合運動に加へられるのでなくては駄目だと考へられるのであるが、かういふ血と涙で彩られた消費組合物語をわが「婦人運動」にのせられる事を嬉しく思ふ。



東京共働社の十五年度の賣上げ高は一〇四、七七〇圓六一五（會員數三七七）諸雜費を全部差引いた殘りの剩餘金即ち純益金が一、四二〇圓五八、これが普通の商店であれば、全部自分のものになる儲け高であるわけである。消費組合はこの剩餘金を全部買ひ上げ金高と拂込んだ出資金に應じて各組合員に配當をするので、この東京共働社では、

配當金

拂込濟みの出資金に對し　年六分
米、炭以外のものの買上げ高に對し　壹圓に付貳錢
米、炭の買上げ高に對し　壹圓に付壹錢

づゝの割合で配當をする事になつて、最も多額な配當をうけた人は、貳拾貳圓九錢受取つたといふのである。

この配當金に就いて、當日の速記錄には次のやうに興味のある討論があつたと書かれてゐる。――(飯塚)配當金は組合員に配當してしまふか如何(石出)役員側の希望としては、この組合をもつと發展させるために、純益金を全部出資金の中に繰入れて組合の資本として有効に使ひたいと思ふ(八代)配當は、これを現金でみんなに分配してほしいと思ふ。その理由は、たとえ少しでも買上げ高や出資金に對して配當金を受取るといふ事は餘程主婦たちを喜ばせ、結果に於てへタな宣傳よりはずつとよく消費組合といふものをひろめる事が出來るだろうと思ふ(廣田)主婦たちが配當金を貰つて喜ぶだらうといふ事は當り前ですが、然し、現金で配當すれば喜びはほんの一時的で、かういふあてにしない不時の收入といふものは無駄になり易いものである。めい〳〵がこれを郵便貯金にするとしても組合としてまとめて預けておくよりは利率はずつと少ないし、又、貯金などは結局大きくまとめてブルヂョアの營利事業に貸出されるものであるから、われ〳〵無產者のためには何にも用をなさぬわけである。そんな事にれかしておくよりは組合のためにこの金子を有効に使はせて頂くやう、皆さんよりも主婦がたに充分說明して頂きたい云々と。





小石川區諏訪町三十一
東京共働社の
寫眞であります

一　大爭議の教訓

勞働者が賃銀値上げの要求を持出して、はてはストライキまでやつて資本家と爭ふ。幸にして勞働者側の要求が容れられて賃銀は幾分よくなつたとする。その、よくなつただけの賃銀の差額は誰れの懷中から支拂はれるのであるか。資本家のか？

否々。資本家はそんな場合に、決してさういふ割の惡い支出で懷中を痛めるやうなことは決してせぬものである。では誰の懷中からそれが出るのか？　我々のである。われ〳〵の懷中から出るのである！　即ち、直接に間接にわれ〳〵の生活を脅かして來るところの物價騰貴といふ事がそれである。だから見たまへ、ストライキがあつた、勞働者側の要求が徹つた、賃銀は騰つた、と來ると、きつとそれに關聯した產業部門の品物はぢり〳〵と値上げしてかゝつて來るから見たまへ。

こゝ十年程の內にわれ〳〵勞働者の賃銀は數倍に騰つた。然し物價は更にその數倍騰つてゐるのである。

働けど、働けどなほわが暮し、
樂にならざりぢつと手を見る、

といふのは啄木のうたであるが、賃銀値上げして、さうして更にラクにならないのはわれ〳〵勞働者の生活狀態である。こゝに現時喧しい社會問題の核心がある。

×　×　×

大正七八年といへばあの歐洲大戰に依る經濟界大好況の時代である。各工場で職工の賃銀は天井知らずの騰り方をしてゐた。

その當時私は砲兵工廠に勤めてゐたのであるが、官營であるこの砲兵工廠では民間の工場勞働者に較べては時間の點でも賃銀の點でも、すべてにぐつと劣惡な勞働條件であつた。廠內のあちこちにそれに對する不滿不平の聲は聞いても未だ火となつて燃え揚がるには至らないまゝに二ケ月たち三ケ月經ち半年が經つて行つた。

果然八年の八月、例の工廠の大爭議が勃發したのである。爭議は慘敗したのであつたけれど、結果に於て賃銀は約二倍に騰り、その他の勞働條件も遙かによくなつて、とにかく工廠內勞働者も世間並みの待遇をうけるやうになつたのであつた。

然しながら賃銀の値上げに正比例して――否、もつと加速度を以て物價はうなぎ昇りに登るばかりであるのであるから我々は考へざるをえなかつたのである。既に爭議に依つて二十五名の入獄者をわれ〳〵の仲間から出した。その他有形

無形にこの大爭議のためにわれ〳〵が支拂つた犧牲は實に大きく深いものであつた。而も僅かにかち得たところの勞働狀件の改善も賃銀の高くなつた以上にまもなく物價が高くなつたとすれば、差引きわれ〳〵の手許に何が殘つたであろうか。まことに、われ〳〵勞働者が如何によく鬪つて賃銀を値上げし、勞働時間を短縮したところで、それに依つて來るところの缺損は、全くみな再び何らかの形でわれ〳〵勞働者の肩に引掛けられる許りである。反つて資本家にいゝ口實をそのために與へることになつて、物價は二倍し三倍して騰るのが常である。

　こゝで熟々考へさせられたのであつた。われ〳〵が勞働者として、卽ち生產者としての組合運動ばかりやつてゐるんでは、結局一つの環をめぐつてどう〳〵廻りをしてゐるやうなもので、いつまで行つてもラチが明かないのである。組合運動に依つて多少なりと賃銀が騰る。時間も短縮される。而もその結果物價騰貴と來るのでは、結局もとの默阿彌である。組合運動に犧牲を拂つただけがわれ〳〵の拂ひ損になるわけである。われ〳〵が、生產者としての組合運動に力をつくすと同時に、それ以上に、消費者としてのわれ〳〵の途を開拓してゆかねば究極のわれ〳〵の解放はいつ迄經つても來る筈がないのである。

　おぼろ氣ながらも消費者としての解放運動卽ち消費組合運動に一道の光明を見出したわれ〳〵は、その頃未だほんの力弱い、小さいものにすぎなかつた大島共働社（のちの消費組合聯盟）を絕大の力としがみついて、困難な、けれども希望に輝いたたど〳〵しいわれ〳〵の步みを步み初めたのであつた。

　以上、わが東京共働社の誕生までのいきさつである。

一　東京共働社の誕生

　初め、十五人足らずの同志（皆工廠に働いてゐる者）が若干づゝ持寄つて五〇圓の積立金を作つた。そしてこれを大島共働社の岡本利吉氏に託して萬事よろしくお願ひ申すことにした。丁度十年の十二月のことで、主として年末年始に必要な雜貨類を分けて貰つたのであるが、値段は一般の市價よりは幾分廉くしたのであつたけれど、いろ〳〵の雜費を差引いてなほ、十二月と一月の兩ケ月で金拾圓也の剩餘金を產み出だすことが出來た。

　この結果に勢ひづいたわれ〳〵は、悉しい表を拵へて組合

員全部にこれを發表して加入をすゝめたところ早速七九名出來た。そこで一口一〇圓として全部で一三七口の申込みがあつて速座に三三五圓の拂込金が集つたから、この三三五圓を基金にして正式に、産業組合法に依る組合を作ることを東京府知事に認可申請した。認可が下つたのは十一年の四月十七日であつた。

　かう書いてしまへばそれだけのことであるけれど、其間の我々同志の苦鬪は實にひどく慘めなものであつた。何分にも大島共働者とて未だ出來たばかりの貧弱なものであつたし、殊によその組合にまで品物を供給するといふところにまでは成つてゐなかつた事であるから、全部われ〳〵が、工廠の勞働を卒へてからかはるがはるに大島迄(凡そ　里位はある)出掛けて行つて必要だけのものを脊負つて歸るのであつた。その頃工場の退けが七時、從つて歸りは大抵十二時すぎで最終の赤電車にやつと間にあふ位が普通であつた。おそくなりすぎて、途中まで限り電車は進まず、大きな重い風呂敷包みを脊負ひ乍ら雪吹雪の中をとぼ〳〵と歩いて歸つた晩のことなどは忘れやうとしても忘れることが出來ない憶出である。

　又、組合としての信用が未だ少ない初めの頃は組合員からの注文に應ずるだけでも一仕事で、その仕入金の不足額はいつも自分たちの着物やその家族のものを質入れして埋め合せ〳〵してゐた。利子はわれ〳〵が負擔するのであつたことは云ふまでもない。そんな事らのために、かういふ仕事の意義を理解しない家族たちを泣かせたり、憤らせたり、恨ませたりしていろんな不幸の原因を作つたことをあげれば數限りもない。當時、たゞ一途に消費組合へ！　の一念で他の思惑を考へてゐる餘裕もなかつたけれど、われ〳〵の家族はそのためにどんなに泣いてゐたか知れないのだ。私の妻がつひに發狂したのもこの當時の事であつた。

　同志の中で夫婦別れまで陷ちて行つたものもあつた。何しろ毎晩々々、一日の勞働を終へたあとで大島町まで仕入れにゆくもの、慣れぬ手つきで帖簿を整理するもの、明日明後日のプランをたてるもの、次から次からと打合せを要する仕事も出て來て、十二時より早くに自分の家に歸る日とてはないのであつた。毎晩おそくなるものだから集會の場所をあちこちと斷られるので、後にはその集合所を心配するだけにも大分困惑したのであつた。

問ひに答へて

消費組合に入ればどんな實益があるか？

笠原千鶴

個人的自由主義の立場

人間は自分の利益のみを追究し、自分の幸福だけを考へてゐればいゝ。社會全般の厚生は考へないでも世の中は自然と幸福になり、調和する。この觀方が社會運動に對する個人的自由主義の立場であります。資本主義の根本思想は此れで、此の考へ方でやつて見た結果は弱肉强食、强い者は益々富み、弱い者は、益々虐げられるといふ有樣になつて來ました。社會問題は玆に起つて來たのです。だから社會問題の方の考へ方と今迄の自分勝手の自由主義とは全く對立した立場、原理の上に立つてゐます。

我利我利な人とか、若しくは自分のこと、自分の家庭のことしか考へてゐない婦人には、社會運動とか社會運動者の心理がどうしても呑み込めないことがあります。社會運動に努めてゐる夫を理解することが出來ないで、物好きとか醉興とか云ふ位の理解しか出來ない婦人もあります。自分の直接の利益が目に見えて來なければ、心の向かない良人もあります。

「百人分の米を作つて自分は飢え、千人分の布を織つて自分は凍えたり、大建築を建て自分は行き仆れしたり」（葉山嘉樹「海に生くる人々」）するやうな今の社會の組織に怒りを感じ、此の怒りを理論付けたものが社會運動の動力です。

個人々々に直接的な利益の來るのは認ましいことではあるが、社會運動は仲々、さう行くものではありません。古今の義人、志士の傳記や社會運動家の暮しを見ても、このことは分ります。所が、

消費組合運動は社會運動であるが

最も直接的な利益の伴ふ運動です。日用品の賣買といふ非ロマンチックな事柄で、社會をよくしやうといふのです。買手の同盟、消費者の組織が、どれほど大きい力を持ち得るか、一般大衆は知らないで居りました。例へば完全な非買同盟が行はれるとしたら、我國の産業や商業は、現在よりもズツとよくなり、産業商業が一般消費者の利益になるやうに運營されるでせう。

然るに日本の消費組合に就ては、此の精神を理解するに六ヶ數い事情があります。それは從來の購買組合の爲した所の宣傳效果です。そのために、消費組合は單に廉賣の機關、若しくは配當によつて自然に貯蓄の出來る機關といふ位に思つてゐます。消費組合は、生産者より消費者の手に這入るまで途中に介在する人による搾取がなければ今より安くて、いいものが手に這入る事になるのですが、目的は只之れだけではありません。大目的は先づ中間商人の排除、進んで自己生産、（消費組合が組合所有の土地

で物資を生產すること）に進むことです。現在英國やロシアでは、そのやり方に違いはありますが、社會解放上、非常に大きな業績を擧げて居ます。玆には中間商人の排除のことだけ申します。

中間商人の排除

例を引いて話しを進めます。東京の人口の食べる米について次のやうな計算が得られます。

一人一ヶ年の米の消費高　一石一斗餘　（大正十五年）

東京正米卸賣標準相場　四一圓六五　（大正十四年）

同白米小賣平均相場　四九圓九八　（大正十四年）

此の卸と小賣値段との八圓三十三錢といふ開きの中、精米費、運搬費、勞力、其他當然の諸掛りを六圓とし、殘り二圓を、米屋關係の餘分の利得とします。消費者から二圓の搾取をして米屋は、肥えて行きます。東京で米屋は百七十三戸に一戸（大正十一年）といふ割で、皆立派にやつて行きつゝあります。そこで、此の東京が生產配給をする一大消費組合網で蔽はれてゐたらどうでせうか。東京の人口を三百六十萬人として年七百二十萬圓といふ金が、組合の所得―結局組合員の利といふことになります。（此の七百二十萬圓を直ぐ分けて、しまわないで、此をまとめて共同管理の下に置き、此の資金で生產分配をする所に此の運動の本質があるからですが、玆では詳しく述べません。）

賀川氏杉山氏等は消費組合運動に大變熱心に運動されてゐますが嘗て、こんな數字をあげてゐられました。農民は六千萬石の米を作り其の價格だけでも二十四億圓の賣上高を持つてゐる。所が日本の土地は米、獨等に異り痩せてゐるから肥料を買はればならない。此の肥料代が六億圓を越し、その中三億圓近くまでは外國より輸入してゐます。此の際百軒足らずの肥料貿易商によつて莫大な利益を搾取されてゐます。また日本で人造肥料會社は有力なるもの十一、その資本金、八千萬圓此等も事業の聯合を企て、利を貪ることに拔目はありません。日本で現在最も貧乏な生活をしてゐるのは農民であるが、此の農民約五十五萬軒が固い團結を作つたならば、肥料のみに就ても利益する所は大きいものです。

今日我國では年に一億圓近く外米を輸入してゐますが、此の中間に立てる指定商人が莫大利益を橫取りしてゐます。此が英國の消費組合のやうに海外の自巳の農場から自己の汽船で運ぶのであつたらどうでせう。

一般消費者は此の消費といふものゝ意味（社會的意味）を更に深く考へ團結し、此の團結の力で、物資の生產及配給に、昔のやうな、沒交涉な無知な態度をすて、積極的に、計畫を立てやうといふのです。

尙此れに關連して、現在の商賣のやり方が共喰いで、相手を倒さなければ、自分の榮えない世の組立てとなつてゐます。此は小は小賣商店から大は國家まで同じことです。顧客を奪合ふために、廣告、宣傳をやります。競爭の損を知つて合同されゝば尙消費者のふところは傷みます。新宿の布袋屋で十錢の足袋を賣出して名を廣めましたが、之は廣告費として見らるべきものです。昨年三越では廣告費三十萬圓、事業縮少の白木屋で二十萬圓、松屋は三越以上だつたと

の事です。賣藥は定價の約一割が藥そのものゝ實費で、他は包裝、廣告、手數料等ださうです。消費組合が完成すれば之等の社會的冗費はなくなり、それだけ金が更に生きて使はれることになります。

一方江戶時代の武士的階級から習慣づけられて來た、根强い商人の御用聞と――主婦の大名買ひは、仲々なくなりません。新居格氏の「高臺の家」（婦人運動一月號）のT夫人はかう云つてゐます。「……あなたは御用聞きをひどく攻擊なさいましたけれど御用聞きは賴めば水も汲んで行つても吳れますし近所に火事でもあると早速駈けつけて來てくれますわ。消費組合はさうしたことをして下さいますか。」

T夫人は御用商人の平身低頭と揉手とが奴隷の如く裝い然も其が欺瞞であることに氣付かないか、然らずんばT夫人は御用聞は無批判的に一階級下の人間と思うてゐるかである。消費組合はかうした人的關係を不快に思ひます。

組合員の共同仕入、その仕方は仕入係りの鑑別眼に信賴する。玆には廣告も立派な包裝も要りません。各組合員の協同運動であるから仕入方、經營、賣買は平等に各組合員の管理の下に置かれます。

配當金

此は購買額に應じて、組合員の過拂分を拂戾すことです。株式會社の利益配當とは性質が全く違つてゐます。だから配當といふ言葉は誤解され易いのです。前に述べたやうに、從來の消費組合が、物の安いこと及此の配當のみが目的とされて來ました。然し眞の理解は此れ以上の所まで進まなければならぬことを旣に述べました。

此れだけの理解の後に、配當金を問題としたいと思ひます。新興消費組合は理想は健全な所にありますが經濟的にしつかりしてゐないため往々此の配當の少額なことがあり、その他不便不都合な點もないとは申されません。然し東京共働社の如きは大正十五年度に於て配當の最高二十二圓〇九錢の者があり、昨年五月創立の西部共働社でも四圓餘の者がありました。

配當金については注意すべきは、前にも一寸ふれて置きましたが一定額までは拂戾さないで組合の共有財産とすることが原則的であるといふことです。此の共有財産による生産が、資本主義的濟組織の諸弊害を改造するといふのです。（二、二、六）

（三十四頁ヨリツヅク）

會主義に近接して來たことだと思はれます。コンミユニストと雖も、プロレタリヤ獨裁を永遠の目的としてゐるのでなく、それは目的への過渡時代であり、手段であることを認めてゐる。だから問題は窮極の點にあるよりも双方に認めるその過渡的時代と手段との相違だと言ふことが出來ます。しかしその過渡期に於けるアナーキストの具體的方法手段は未だ明らかに示されてはゐないと思ひます。それは今後に於て示されるでせうが、それによつて、兩者の態度は更に明確になるでせう。

文學の上に現はれる相違もそれによつてやうやく明瞭になり、具體的になることだと思ひます。（二月十九日朝）



プロレタリヤ文壇最近の傾向に就て

山内房吉

最近のプロレタリヤ文壇に於て最も著しい現象は、コンミユニストとアナーキストとの分裂對立でありませう。併し、この對立は何も今に初つたことではありません。地震直前のプロ文壇がちようど現在のやうな狀態でした。その當時も、『AかBか』といふのが一つの合言葉のやうになつてゐました。そしてA(アナキズム)に屬する作家とB(コンミユニズム)に屬する作家とは互に排撃し合つて、遂には理論鬪爭以上に感情的な鬪爭に陷つてゐました。それに較べると最近の對立は双方ともかなり、理論的になり、從つてその理論も遙かに緻密になつてゐることは事實です。それは確かにプロ文學の進步ですが、それにしても矢張り感情に走つた中傷的な泥仕合から完全に免れてゐるとは言へません。このことは理論鬪爭の徹底のためにお互に警戒すべき點だと思ひますが、とにかく對立してゐることは事實で、しかもこの對立は當然の成行でもあるのです。それはプロレタリヤ階級の意識的成熟につれて、意識の一形態である文學も當然に純化され、統一されるべき必然性をもつてゐるからです。いつたい、地震前に既に起つてゐたこの對立が最近まで顯著な現象とならなかつたのは、少くとも表面に現はれなかつたのは地震後の一般的反動がプロレタリヤの陣營內での理論的鬪爭に餘裕を與へるよりも暗默のうちに反動的勢力に對する共同戰線を必要とした結果に過ぎず、何れは來るべき分裂だつたのです。何故ならコンミユニズムとアナーキズムとは到底一致し得ない思想だからです。

それではどういふ風に違ふか? ことに双方の文藝上の理論がどう相違してゐるか? といふことを解說するのが私に

與へられた題目ですが、細部に亘る議論ではともかく、私自身Bに屬するものですから、完全に中立的な第三者として解說の任に當るには私は不適當だと言はねばなりません。しかし、つとめてこゝでは公平に兩者の理論を吟味することにします。

×

この一月以來、到るところで論戰が行はれました。「都」新聞紙上の新居格、藤森成吉氏の論爭を皮切りに、引續き「東京朝日」「每夕新聞」「新潮」等の誌上で行はれ、今尚機會ある每に議論が戰はされてゐるのであります。ことに「文藝戰線」と「文藝解放」とは雜誌そのものが兩派を代表してゐるやうな形です。

これらの論爭の中心となつた問題は、

一、目的意識論と自然發生論。

二、個人主義、超個人主義の問題

であります。

自然發生と目的意識の問題は元來レーニンがその著『何を爲すべきか』に於て、無產階級運動の方向を論じたものであつて、それを文學運動に適用して、青野季吉氏が、無產者文學は今や自然發生的ではいけない、明確な目的意識の下に組織されねばならぬ、と論じたことに端を發してゐるのであります。(文藝戰線昨年九月?)青野氏の所論は、プロレタリヤの文學は文學運動がなくとも、農村や工場やのプロレタリヤから生れる。また、プロレタリヤ化したインテリゲンチヤもプロレタリヤ的作品を書かずにはゐられない。が、それらは自然發生的なプロレタリヤ文學であつて、プロレタリヤの文學運動ではない。文學運動はその自然發生的な文學に社會主義的な目的意識を植付けるものでなくてはならぬ。社會主義的目的意識へと組織しなければならぬ、といふのでありました。

これに對して新居格氏は「新潮」紙上で、さういふ目的意識を植付けるコンミユニズムの文學は「黨派的文學」だ。しかし、文學はもつと自由なものでなくてはならぬと論難しました。

その後、この目的意識の問題を中心にして盛んな論議が到る處で行はれるやうになつたのです。アナーキスト側の言ひ分は、凡そプロレタリヤの文學は初めから目的意識をもつてゐる。しかし、それは單なる目的意識の把握ではない。その

目的意識を自然發生的な境地に於て更に強く把握し、それを本能的なものにまでしなくてはならぬ。つまり、目的意識は他から注入すべきものではなく、それ自身を自然發生的であらしめよ、といふのである。

から解釋して見れば、目的意識の問題だけでは兩者の間に甚だしい距離があるとは思はれません。アナーキストも目的意識を全然拒絶してゐるのではなく、それの受取り方や現はし方に於て異るだけだと思ひます。尤もこの目的意識の內容が一は共產主義的であり、他は無政府主義的であるのは云ふまでもありません。そこで兩者の根本的相違は文學に目的意識を取容れるか容れないかの問題ではなくて、その目的意識の內容が根本的に異つてゐるに過ぎません。しかしこの相違は根本的であるだけに、決してわずかの相違でないことは勿論です。

そこで第二の、個人主義、超個人主義の問題が當然起つて來ます。新居格氏と藤森成吉氏との論爭がそれでした。コンミユニストとしての藤森氏は超個人主義の立場からアナーキズムを資本主義と社會主義の中間に住する個人主義だと論斷しました。これに對してアナーキスト側は、アナーキズムといふ名稱の下に之を一括して個人主義と見做すのは見做す方の無智から來る速斷だ、アナーキズムも今では同志意識をもつてゐる、集團意識、階級意識をもつてゐる、だから單なる個人主義ではないといふのでした。

こゝでも問題は、やはり、プロレタリヤ文學が個人主義的であつてはならない。超個人主義的でなければならぬ、といふ一點は双方共に認めてゐるのです。卽ち、プロレタリヤ以前の文學は個人主義文學であつたが、プロレタリヤ文學は超個人主義——集團意識的文學でなくてはならぬといふことは何れも否定しないのです。

問題はアナーキズムが個人主義思想であるか否かに懸つてゐると思ひます。私はアナーキズムの深い研究を持たないので、詳しい解說をすることは差控へますが、しかしこれだけは言へると思ひます——『個人の自由』を出發點とし且つ目的としてゐるアナーキズムは、その本質に於て個人主義的思想の系統をひいてゐるものだ、それが、超個人的行動を認めるに至つたとすれば、それは最後の目的に到達するまでの過渡的段階を認めるに至つたことを意味し、その意味に於て社

（以下第三一頁へつゞく）

無題詩

松本淳三

暗らい、暗らい、トンネルの中で
誰かゞオー……イと叫んでゐる
すると、その聲に應じて誰かゞ
やつぱりオー……イと叫んでゐる

泣くまい、歎くまい
くたばるまい
ほんとの叫びを擧げれば誰かゞきつとその叫びに應じてくれる。
オー……イ、　オー……イ
オー……イ、　オー……イ
暗らい人生だがしかし明るい！

蟻の結婚

オヴギスト・フォレル

蟻の結婚と蜜蜂の結婚とは、屢々比較される。蜜蜂のそれはメエテルリンクに依つて特に次の文章の中に、女王若しくは處女である雌や雌のあとを追うてゆく雄の群に就いて、實に詩的に、實に巧みに描寫されてゐる。

『彼女はその翅に醉ひつゝ、また彼女のために情人を撰び、大空の靜寂の中に於て最も強き者のみが彼女に達すべしといふ空間の素晴しい法則に從ひつゝ、彼女は斷えずのぼりゆく。と、朝の青い空氣は初めて彼女の腹部の氣孔に流れこみ、そして彼女の體の中ばを含んで空間を榮燿となす二つの氣管囊へ結びつけられたる無數の毛細管内で、恰かも空の血の如く歌ふ。

彼女はなほものぼり行く。彼女は神秘な攪亂する小鳥などの最早や通はぬ廣漠たる領域に到達しなければならぬ。彼女は尚も高くのぼり行く。と、もう彼女に續く群は薄らぐ。落伍する者がある。弱き者、不具の者、老いたる者、發育の不完全な者、不活潑な若しくは慘めな城市の營養不良の者どもなどは、追從を思ひ切つて虚空の中に消え失せる。オパール色の無限の中には最早精力絶倫な僅かの群しか浮いて居らぬ。彼女はその翅に最後の努力をさせる。そして見よ不可思議な力をもつ撰ばれたる者は、彼女に追ひつき、彼女を捉へ、彼女を心から動かす。そして二重の熱にかられ、彼らの抱きあへる飛翔の上りゆく螺旋は、戀の敵對的熱狂の裡にしばし渦を卷いて亂舞する。』

それにしても一妻多夫の蟻にあつては、一婦一夫の蜜蜂の女王の結婚のやうに、全ては到底それほど詩的なものではない。まづわれ／＼の有りふれたミルミカ・ルブラ種から見てゆく。私自身しば／＼さうした結婚に立ち會つたことがあるのである。

結婚飛翔は凡ゆる蟻の團體の中に於て、全く以て大した出來ごとである。孵へつたばかりの雌と雄との翅がかたくなるにつれて、彼らはます／＼大膽なことを敢てするやうになり、團體の中には動搖がます／＼はげしくなつて行く。たゞに有翅の性が飛翔をなす數日前からその準備に取りかゝるのみでなく、働蟻なども彼等と一緒にそわ／＼し、そして日常の仕事など打切つてしまふ。働蟻等は巣から出て觸角を以て彼らを愛撫し、發ひ、その後について草の葉末へのぼつて行き、そしてエッシエリッヒが旨く云つたやうに、羊群を取卷く牧犬の如く、彼らのぐるりへ前哨に立つ。そしてかうした調練は、温度や天氣工合に依つて時には數日も續く。普通雄どもが先きに飛び立ち、そして雌共は彼等について行く。然しながら雨性の遲く孵へつた者共は屢々一日若しくは兩三日經つてから始めて飛翔をなす。この點に關しては何ら一般法則な

るものはない。雨が降るか風が吹くかすると全てが一時中止となることもある。

たとへば八月の晴れた午後などに、近傍の殆んど凡ての蟻體は一齊に、一つの大なる群をなして飛上る。その時にはもう敵といふものはない。飛翔にあたつて雌も雄も一と日の間異なる民族間の憎惡などはかなぐり捨てゝ、崇高な國際的相互愛を抱く。各團體の働蟻らはやけにそれぞれの翅を有する者どもにつき纒ふ。けれども後者は草の葉末へよぢ登り、そして名殘りを惜しむ風もなく、彼等の住居と養ひ親等とを永久に放擲する。それは是非なき本能のどうすることも出來ない命令なのだ。それから、全ては共通の群の中に他の者らと混つてゆく。それが時として、空の青味を幾らか暗くさへもする。屋根、白楊の天邊、教會の鐘樓、丘の頂、時としては突立つてゐるか若しくは徐かに歩いてゐる人間をさへも多くの場合、蟻群は足場となし、集合點となして、或は空中に調子をとつて舞ひ、或ひは歩みゆく人について行く。ところでミルミカ・ルブラにあつては、雄は殆んど雌ほどの大きさである。彼がうまく後者の一匹におひつくと、この時一種の接戰となつて彼らは地べたへ落ちて來る。然しながら、斯くも輕ろやかな者共にとつて墜落如きは何でもありはせぬ。彼らは平氣の平左、一緒に地べたを轉々し、そして交尾を遂げる。それからつゞいて五六匹の雄がそれからそれと、矢張りこの雌と交尾する。だがこれつばかしの事で彼らはちつとも喧嘩などはしないのだ。一匹は他の者の終るまで兩三分間待つてゐる。それだけのこつた。交尾をしあげると、屢々觸角を以て愛撫し合ふ。それから全ては又、亂舞をするために再び立つてゆく。

然しながら幾許もたゝない内に、恐らくその翌日に、取り分け鐘樓をとり卷く廻廊は雄と、時には雌との死骸を以て埋められる。雄は凡て精力の消耗に依つて死に、そして多くの昆虫に餌食とされる。雌の一部もまたさうである。

かくて一とたび受精するや、生きながらへた雌どもは、身體を捩ぢつたり捩ぢつたりして以てその翅を脱落させる。それから彼らはどつかへ飛んで行つて、めい〳〵一つの室を穿ち、新社會を建設するために何れも一人でその中へ閉ぢこもる。ユベールは受精したばかりのラシウス・ニゲルの一匹の雌について次ぎの如く物語つてゐる。

『私は受精せる雌を三匹もつてゐた。其一匹を取つて受容器の下へ誘ひ入れた。即ち私は一片の葉を差出して彼がそれへ乘つたところでおのづと其所へ行かせ、さうして彼れに手をば觸れることなしにその新住所へ入れてやつたのだ。

彼はその住家の底の濕つた土を認めるや努力して翅を擴げ、それを頭の先きへ持つて來た。彼はいろんな風にそれを交錯せしめ、此方へかしげたり彼方へかしげたりする。そして身體を奇妙に捩つたかと思ふと、その四つの翅は私の目の前でぽろりと落つこちた。さうした荷卸しをしておいて、彼は休息し、肢を以て胴に刷毛をかけ、それからその土の上を歩きまはる。そこへ宿所を捜がし求めるものゝやうであつた。』

今度は雌がその小さな雄よりも遙かに大きくて、彼を室中へ負ぶつてゆける樣な

の室中結婚を見よう。それは吾々のラシウス・テトラモリウム、ソレノプシス及び北米や亞細亞のそれらに相當する蟻共の場合である。往々夏の日に有翅の蟻が大きな群をなして現はれ、果てしなきその數が室を暗くすることのあるのは常にこれらの蟻である。この場合、抱擁せる番ひが墜落し、そしてその戀を地上に於てなしとげるやうなことは決してこれなき事である。全ては空中で、屢々非常な高みに於て、嫉妬といふもの、影もなき純然たる友愛關係をもつて詩的になしとげられるのだ。私はラシウス・フラウスとラシウス、ニゲルとにあつて、雌が既に二匹の雄をおぶつてゐるにも拘らず、第三の雄もその背上に來たり止まつてそして辛抱強く自分の順番の來るのを待つてゐるだけでなく、倒は僅にも引つきりなし　彼へついて來る者共のあるのを見たことがある。一つ一つの交尾は僅かに數秒、せい〳〵の處一分間位のものである。そして此等の哀れなる小さな雄共は、その生存の唯一の目的を成就してしまつたのだ。

親愛なる讀者よ。諸君は笑ひながら、君は若しやこれらの空中結婚を飛行機からでも觀察したのかと訊れるかも知れない。そんな事はない。だつてラシウス・フラヴスやラシウス・ニゲルの雌は何れもそんなに高く飛びあがるわけではなく、時々は空中で交尾中のもの、或ひは手の上へ來て止まるものをわけなく二三匹捕へたりする事が出來るのだ。

沙漠、草原などに住むカタグリフォスに就いてサンチは私へ次ぎのやうな事柄を書き送つてくれた。——

「カタグリフイス・ビコロルに就いて云へば、その有性の者ども——雌と雄とは地面を非常に速にかけずり廻り、追ひつ追はれつして交尾をとげる。働蟻共も歡樂に參加する。そして彼等は屢々有性の者共をその翅に依つて引とめたりする。雌はすぐ早く翅をおとす。雄の翅は割合に短い。だから連續的な飛翔が出來ず、地上を驅けながら交尾をとげるものなのである。それは晩春の極暑い日に起る。それは又、カタグリフォスの屢々巢吹ふ祢會でさへも稀ではない。そんな場合には、壁の上を雄が雌についてゆくのを容易に觀察することが出來る』と。さうしてみると、たとひ雌と雄とが双方とも翅を有つてゐるとしてもある種の蟻共は地上で交尾をとげるものなのだ。斯んな風に蟻のところには、空中の結婚から地上の結婚に至るあらゆる過渡がある、そして彼等の翅の目的は雄と雌とに依つて、それぞれ異つてゐる。

サンチの意見に依ると、ボトリオミルメックスの受精は巢の外で行はれるとの事である。然しながら氏はそれを見たのではない。之れに反しホーリエーにあつては、受精は巢の中で、兄妹結婚に依つて行はれるが、それはまた巢の外でも行はれ得るのである。サンチはまたテユジーに於て、モノモリウム・サロモンスと、ソレノプシス・ルウとの結婚飛翔をみた。これらの二種にあつて飛翔は仙人掌の上、またはサンチ自身の上に起り、そして同一の雌が矢繼早やにそれからそれと數匹の雄と交尾したのであつた然しながらモノモリウムの雌は、あとから〳〵と來る雄を愛想よく向へるために、交尾をし上げた雄をば直ちに噛んでおつ拂ふのであつた。一つ〳〵の戀は僅か三十乃至四十秒のものであつた。

サンチに依ると、チユニジーに於けるメッソオル・バルバルスの雌と雄とは、巢を出てそして大方空中に於て雨の前日に交尾する。それに依つてアラビア人は、天氣を前以て豫言することが出來たのだ。（椎名其二氏譯フォレルの『蟻の社會』より）

指導者難

富士辰馬

この頃、私はマルトフの『ロシヤ・マルキストの手記』といふ長い追想記を飜譯してゐたが、このマルトフは、周知の如く、後にメンシエイキの首領となり、メンシエヴイズムのイデオローグとなつて、ボリシエウイキと反りが合はなくなつたが、中頃まではレーニンと一緒になつてうんと働いた鬪士であつたのである。この追想記にはプロレタリアートの鬪士が經驗する事件が山と描かれて居り、研究會――學生や勞働者の――や宣傳やアジテーションや檄文の作製や宣言書の播布や集會や演説や報告文の朗讀や逮捕や裁判や追放や監獄に於ける悲劇やの連續でそこに登場する人物は勞働者や婦人や女工やインテリゲントが幾百といふを知らない程である。有名な處ではレーニンやスッルーウエやツガン・バラノフスキイやミハイロフスキイやアクセリロッドやクルップスカヤやウオロンツオフやの面々が縱横に活躍してゐる。それと同時に眞の勞働者や女工の鬪士がインテリゲントに負けずに運動の指導者として踊つてゐる。

ところで、私はこの追想記を譯しながら、プロレタリアートの解放といふ仕事が如何に困難であること、就中、優れた指導者や組織者を得ることが如何に六ケ敷いことであるかを痛感した。書齋に潜つてゐる理論家の議論がアカデミックで眞プロの反感を買つたり、勞働者の研究會に出動するインテリゲントが勞働者を『上から下へ』眺めたり、さうかと思ふと

あの男ならとみんなに信ぜられてゐた闘士が官憲の間諜になつたり、熱烈な學生の革命家が後になると反動派の縣知事になつたり、理論に精通し、活氣に横溢し、アジテーションに素晴らしい技能を示した若い勞働者が、政治上の虚榮心を官憲に利用されて運動を壞したりして、容易に優秀な指導者が作り上げられない。この『指導者難』の鉗壺からレーニンは鍛へ上げられたのである。何といつてもレーニンはプロレタリアートの指導者といふ素質を十二分に持つてゐたやうである既成品のレーニンを見る前に未成品のレーニンを見ると、更に彼の首領性が明白になる。その頃には單なるジャーナリズムを以て、即ち、新聞の廣告に依つて指導者は作られなかつた。蒟蒻版に刷つた內密の論文が唯一の機關で、それも秘密を守る必要から絶對に名前を出すわけに行かなかつた。されば集會と研究會と對談とが闘士の人物を周圍に判らせる手段であつたのである。

――『ウラヂーミル・イリッチ・ウリヤノフは友達の中では更に『親爺』とか『リヤープキン・チヤープキン』と呼ばれてゐた。あとの渾名の起原に就ては『彼はどんなことにも智慧が屆くからだ』と私に友達が說明して呉れた。』――

とマルトフはレーニンのことを書いてゐる。リヤープキン・チヤープキンはゴーゴリの脚本に出て來る主人公と覺えてゐるが、前の『親爺』はその性格の上で彼が自分の周圍にどんな印象を與へてゐたかを想像させるものである。

・　・　・

私が國でも今や無產者の政黨が幾つも出來て、而も從來の『首領』間に改宗や改黨が頻りに行はれ、後に續かうとする、『灰色の大衆』はどつちへどんな風に行つたものか、少しく歸趣に迷ふが、こんな風になつてくると、正に秀れた指導者の必要を痛切に感じる。そこで私はどんな型がプロレタリヤの指導者になるだらうか、プロレタリヤの指導者にはどんな素質が必要であらうかといふ問題に礑と當面する。

これが舊階級を代表する政黨の首領や幹部にならば、謂ふ所の『親分肌』があつて、『萬事は俺の方寸にある』とポンと胸を叩いて見せたり、風采が堂々としてゐたり、そして何處からか『金を引出す能力』――これが最も大切――があれば、忽ちに群盲を率ゐることが出來ようが、新階級を代表する政黨の指導者や幹部になるには右の條件は殆ど一つも役に立たないであらう。

第一に政治上の高能兒であつて、運動の過程を明確に認識し、その局面局面に對應する方策を樹て得る頭腦がなければならない。萬事は俺の方寸になる』と胸を叩いて反り身になつた所でおつかない。『金を引出す能力』に至つては却つて邪魔になり、大衆に『買はれたる首領』の疑ひを抱かせる。

然らばどんな型と條件が必要であらうか。これに對する回答は六ケしい。何故なれば、首領にもいろんな型がある。一と口に人を牽きつける魅力といふが、その魅力は倫理上や道德上の用語を以て簡單に說明することは出來やうが、それは實際に當つて何の役にも立たなくなる。

そこで私は一つの首領を持出して、讀者の參考に供して見ようと思ふ。これは政黨の首領ではない、勞働組合の指導者である。一八七八年にロシヤのペテルブルグには罷業が旺んになり、この罷業に促されてロシヤで、殆ど最初の『北ロシヤ勞働組合』といふのが生れた。勞働組合と名づけられるものはこれよりも先に發生したが、眞の勞働者が創つたのはこれが最初である。ところでこの組合の創設者が私の自分に課した課題 — 首領の型と條件？——に答へる爲に一つの材料となるものである。その首領はステパン・ハルツーリンといつて、ロシヤの社會史に有名である。彼は自分の創つた組合の失敗から非常に絶望して、後にはテロリストとなつたが、最初は決してテロリストではなかつた。

彼はウヤートカの指物師で、後にペテルブルグに出て、或る工場に職を發見し、それからずつと運動に沒頭した。そのハルツーリンに就て例のプレハーノフはこんな工合に書いてゐる。プレハーノフは生粹のインテリゲントであるが、流石に勞働者の父と謠はれただけあつて、實によく勞働者の眞價を確把してゐた。そこでプレハーノフは曰ふ、

『……彼は（ハルツーリン）その風采ではその性格に關する正確た概念を得られない人間の一人であつた。若い、背の高いすらりとした、顏色の好い、表情に富んだ眼を持つた彼は非常に美しい若者の印象を與へたが、それだけでは解らない。秀れた智力をも語らなかつた。彼の擧措で第一に目立つたのは何となく氣まりの惡さうな、殆ど女のやうな柔かみであつた。人と話をする時、何となく當惑して、バツの合はぬ言葉や言ひ過ぎた意見を吐いて對手を憤らせやしまいかと心配してゐるやうである。彼の唇からは幾らか當惑したやうな微笑

が消えたことがない。この微笑は『私はかう思ひますが、若しかお氣に障つたら、御免なさい』と言ひたげである。かういふ擧措は、ずつと以前、若い、育ちの好い田舍者が初めて世間へ出た時なぞに見受けられたものである。だが勞働者に似つかはしくない。……

彼と親しくなつたのは仕事の上である。一般に勞働者はインテリゲンチヤの仲間がお互に自分の腹を打開けながら好ん事業する長話しに深入りする暇がない。ステパンは殊に腹の瀉出を好かなかつた。……話をするのは決して嫌ひではなかつた。それも自分の兄弟たる勞働者とばかりでなく、インテリゲントとも好んで話した。合法者であつた時、彼は自分から進んで學生達の近所に住み、學生達との交遊を求め、書物を借りたりいろんな報道を聞いたりしてゐた。かういふ隣人のとこで一晩ぢう語り明かすことも珍らしくなかつた。だがそこでも自分の意見を吐くことは尠なかつた。會話が何か理論上のテーマに打ツつかる。無智な勞働者を啓蒙するのはこの時だと許り、大喜びになつた主人が長々と、噛んで含めるやうに出來るだけ『通俗的』に語つてゐると、ステパンは、極くたまに口を挿み乍ら、注意深く、幾らか額越しに聰明な眼で對談者を眺めながら、傾聽する。彼の眼には時に善良な嘲笑の表情が現れる。彼の學生達に對する態度には毎も幾分のユーモアが、恐らく、皮肉さへもがあつた。『知つてます、私はあなたのラヂカリズムを尊重してゐます。勉强してゐるうちは、みんな恐しい革命家ですが、學校を卒業して職でも得ると、あなた方の×××氣持は片手で取除けられるのです』とでも言つてゐるやうに、彼は學生の勤勉をも嗤つてゐた。

『彼等の働いゐるのを見ました――と彼は言ひ言ひしてゐた！　こんな仕事がありますか！　二三時間も講義を聽いてあとで一二時間も本を讀めば、それでオ、ライ、さあお茶を飮んだり、話をしに行けつて譯だ！』彼の勞働者に對する態度は全く異つてゐた。勞働者に調戯ふことは自分にも他人にも許さなかつた。殊にインテリゲンチヤには。彼のゐるところでインテリゲントが少しでも勞働者のことを惡く言ふと、彼は烈火のやうに燃え上つた。彼は勞働者を生れながらの乳母しい×××と見て、まめな乳母のやうに面倒を見た。物を敎へたり、本は探してやつたり、職を見つけてやつたり喧嘩を宥めたり、過ちのある者をたしなめたりした。彼は非常に友達から可愛がられた。彼はそれを知つてもつと大きな愛で友

達に酬いた。而も友達との應對にも持前の抑制は失はれなかつた。…彼は饒舌ではなかつた。勞働者が好んで洒落たがる外國語は殆ど使つたことがなかつた。だが熱烈に明確に、納得させるやうに口を利いた。……ステパンの素晴らしい勢力の秘密と一種の獨裁力は彼が一切のことに倦まざる注意を拂つてゐるところにあつた。集會のずつと前からみんなと話し合つて、一般の氣分を識り、八方から問題を考慮するから自然と下準備がちやんと出來てゐる。彼は一般の氣分を表明する。彼の言ふことは友達の各々が言はうとすることとである　だがみんなは、或は怠惰性から或は他の、恐らく、もつと／＼と重大な事に忙殺されてゐて、こんなに考へ深く問題に對することが出來なかつたのである。だがステパンはどんなことにも不注意を以て對することが出來なかつたのである。どんなに些細な實際上の問題でも、その解決を無關心で他に委せることはなかつた。彼は審議さるべき問題に對してちやんと確定した見解を持つて集會に列席した。だからみんなは彼のいふことに贊成したのである　それだからこそ議論が徒らに長びくと、彼は忌々しがり、躍氣となつたのである『こんなことは簡單じやないか、こんなつまらぬことがそんなに諸君を煩はすのか？』と彼の表情に富んだ眼が言つた。

ハルツーリンは非常な讀書家であつた。これは厭が應でも彼に對する周圍の尊敬を喚起した。だがこの點では工場の勞働者を知つてゐる者を驚かすに足りなかつた。熱心な讀書家は彼等の間に稀ではなかつたから、近く識り合つて見ると、ステパンはごく少數の者しか讀み得ないやうに書物を讀んでゐたことが判つた。彼は何故にこれこれの本を披げたのかを毎も熟知してゐた。加ふるに思想は不斷に實行と手を取合つて進んでゐた……』

以上はステパン・ハルツーリンの人間や、仕事に對する態度を――その仕事には觸れずに――プレハーノフの描く所から拔き書いたものである（『革命運動に於けるロシヤの勞働者』キエフ一九二三年、六五――六七頁）此書物が初めて出版されたのは十九世紀の末で、當時の青年に大きた昂奮を齎らしたものであるが、彼は一箇の小首領として興味ある一つの型であると思ふ。

首領の型には、かういふ型の外に、幾つもあるであらう。現在の我が國にもプロレタリアートの中に素晴らしい型が澤山にあることと思ふ。

かうして『首領』のことを考へ始めたら、私の極めて鮮い友人の中からふと『Yasaka』の顔が私の眼前に現れた。彼は、今病氣で何の仕事にも携はつてはゐないが、そして私は彼がどんな觀點から新階級の運動を眺めてゐるか、沁々と聽いたことはないが、若しも彼が眞にプロレタリアートの位置に立つて働いたら、新しい『首領』として若しくは小首領として衆望を擔ひ得ると思つてゐる。彼にはステパンのやうな柔かみがある。さうして『美しい若者』である。彼は周圍のいふことを充分の注意を以て聽く耐忍力がある。そして一般の氣分を把握する能力を持つてゐる，これと同時に彼は可なりに饒舌家である。この饒舌は惡い意味の饒舌でなく、むつゝり屋に對應する饒舌である。殆ど無稽と思はれ、無意味と思はれる彼の話に人々は自然と釣込まれて行く。酒に醉ふと彼の出鱈目は天空を突つ走る。この出鱈目は大言や壯語ではない。對談者の言葉から捉へられた出鱈目である。この時に彼の魅力は絶頂に達する。

彼は種々のサークルに適合するやうに見えるから、或は舊階級のグループでも相當に『働き掛ける力』を持ち得ると言ふかも知れない。だが金を持つてゐる者には却つて『油斷のならぬ男』といふ印象を與へるかも知れない。だから彼は舊階級の働き手にはなれない。その最も明かな證據は彼が常に貧しいことである。

だが彼は『美しい若者』であり、その出鱈目に魅力がある爲に、如何なる女性も彼に磁力を感ぜずにはゐない。これはプロレタリヤのグループや團體の小首領としてはどうかと危ぶむ者があるかも知れない。女と男とは違ふぞと。だが同一の思想や意見も、それが『美しい若者』の口から洩れると、男に取つても女に取つても一般の力となつて現れるもので、決して心配するに當らない。

私は『……Yasaka』に小首領の一型を見るものであるが、今は病氣で仕様がない。

『指導者難』が尻切れ蜻蛉になつたが、これをきつかけに次の機會に本氣で『考察』し直すことゝしよう。

消費組合員となつて

若杉鳥子

消費組合に就いての感想を書かうとして筆を執ると、先づ第一に私の頭に泛んで來たのは『夢みる力のないものは生きる力がない』といつた、エルンスト・トルレルの言葉だつた。この言葉は屢々方々に引用されてゐる。

然し今の時代は何とこの言葉に衝き當る場合が多いだらう。その度毎に私はこの言葉の含む精神と時代とを凝視しなければならない。

實際今の處私達の組合は、まだやつと土から頭を擡げたばかりの、高遠な理想の萠芽に過ぎないといふ感じである。が、英國のロッチデールの如き大組合も、始めは二十八人の職工が、二ペンス三ペンスの金を積み立てゝやつと一磅の資本にして出し合つたものでそれが今日の大をなした事を思ふと、實に夢と熱情とこそは現實のあらゆる困難を突破する。將來はこの西郊共働社も偉大な生産機關を運轉し、銀行や病院を經營し、三越の何倍もあるやうなデパアトメントを持つやうになれば私達も御用聞の如き不生産的制度を廢して、朝毎に、腕に籠を抱へてこの西郊社のデパアトメントの屋上に翻る組合旗を望みながら買物に出掛けるであらう。

尚一層希はしい事は、組合が大きい厨房を設けて組合員に食事を供し、音樂會を催し畫の展覧會を開き、ライブラリィを備へつけてくれる事である。

さうしたら私達の臺所で費す時間は修養なり仕事なり娯樂なりに向けられて今よりはずつと明るい生活ができ、各組合員の家庭の爭議を方向轉換させるかもしれぬ。

こんな夢〳〵おし擴げてゆけば、來るべき次の時代の幻想まで描かれてくる。

夢見る力のない者は、この消費組合の理想を嗤ふ『どうして乏しい僅な資本で、この網の目を張つた樣な資本主義商業の隙間に潛り込んでゆけるか。木の葉の舟で大海を横斷しようとする

やうなものだ』と。さういふ風な消極的な考へに閉ぢ籠つて他人の仕事を冷笑的に見る人は、即ち生きる力のない人だ。

何がどうであらうと、この資本家階級の搾取に對抗する組合運動の一つに遠大な希望をかけて參加する事は、やゝともすれば煩瑣な退屈な事務の反覆とならうとする日常生活に、霧を吹きかける事にもなる。

然し自分はさう信じてゐるやうなものゝ、同志以外の一般の人に加入を勸める場合、かうした思想的方面から說きすゝめても恐らくそれは無効であらう。

『組合に入れば貴君は斯く斯くの利益と便誼がある』といつて、合理的な打算に訴へて大威張りで勸誘しえらるゝ處まで速く組合の發達する事を私は希つてゐる。

私は前に吉野作造氏の家庭購買組合に入れと勸められた事があつたが、宣言書を見ると組合の發達は××を未然に防止緩和するといふ事項があり、それに無產者としては初めの出資金が高過ぎるやうに思へるのとで、所詮は中產階級相手のものであらうと思つて、入會する事を拒んだ。

次に今度の西郊共働社に勸められて入つた、といふのは、前の組合よりも入會金が少額なのが一番まあ入りいゝ條件でもあつたが、註文取りから仕入れから何から何まで一人で働いてゐる大澤氏の奮闘ぶりが、如何にも純粹な無產者運動の闘士らしい眞劍さを持つて自分に迫つて來たからだつた。

そして組合員の一人になつて見ると大澤氏許りでなく委員の方達がみんな熱心で獻身的であるのに驚いてゐる。斯ういふファミリアな團結の中に、皆の人が自然と利己心を沒却して、その結合の輪を大きくしてゆかれる事は、何と輝やかしい希望だらうと思ふ。

そればかりでなく、委員の方でもこれから益々科學的な新しい方法をとつて組合員の利益を計つてゆく事だらうから、此頃某新聞で見た某夫人のやうに、他の組合に入つてゐる人も加入して、Aの組合Bの組合といふ風に、品質と價格とを比較研究して見られるとお互の刺戟になつて良いと思ふ。

それから今の婦人達——あなた方はもう座つてゐて御用ききから見もしない品物を買ふといふやうな、不精な因襲から脫して欲しい。

小ブルジョア、もしくはそこに到達せん事を無上の光榮としてゐるやうな

階級では、婦人が自分で物を買ひに行く等は、野卑な行動でゝもあるやうに戒めて來た。今でも山の手の家庭では妻君や女中が、商人に品物を臺所口へ並べさせて横柄な調子で買つてゐる圖をよく見かける。商人はまた全然幇間的な態度で主婦や女中や子供の御機嫌をとりながら、口頭だけで品物を賣らうとする。

かうした人達の虚榮心は、商人を益々奸佞にし卑屈にし、その土地の風を變化してしまふ。

消費組合は、買ふ者と賣る者とがこんな風な不愉快な關係に置かれないだけでも好い。

郊外生活をするやうになつてからは、道が惡かつたり、街に遠かつたりして止むを得ないで御用ぎきに物を賴む事もあるけれども、市内に棲んでゐる頃は、風呂敷一枚を持つて、ぶらりと散歩に出た。野菜物等は彼方の店、此方の店と見て歩いて、成べく新鮮なものを見つける。そしてこの融通無碍な風呂敷に包んでくる自由な氣持は實に好い。

例へ白鳥の如き洋裝で菜つぱを提げて歩かうが、お召のきもので大根を抱へて來やうが、それは歩く人の氣もちで、繪にもなり詩にもなる。

今の時代の婦人達はもう、座つてゐて小賣商人の妥協や、競爭のみに物價を任せるやうな事でなく、もつと自發的に一家の經濟をとるべきである、從つてまた他人の勞力をも自分の勞力として省くやうに、頭を働かして努力し合ひたいと考へる。

米、炭、石油のやうなものは自分で持つてくるわけにはゆかないから届けて貰ふにしても、月始めに豫定の消費量を成べく書き出して置いて、二度の手數を一度で濟ますとか、小さいものは店にいつて求めてくるといふ風にして、この組合の幼年期を皆で守り育てたいと思ふ。

そして組合員があらゆる意味の相互扶助をなし、組合をその機關たらしめるのは無論の話だが、組合も將來は機關紙を出して互の意見や要求を述べ同志の連絡を取りあひたい。

それから手近かな事では、講習會のやうなものも設けられて欲しく思ふ。經濟、科學、文藝、語學、組合員の中から講師に出て戴くもいゝし、他から講師を聘ぶ事もいゝ、組合員でない人も規定の會費を拂ひさへすれば聽講生となりうる事にしたい。

それからもう一つは、組合員中の不

要の書籍、道具の市場を開いて、お互の不要品を利用しあふ事も便利だと思ふ。

私は、この消費組合經營に就いて、何にも知識は持つてゐない。たゞ考へた事だけを、ありのまゝに書き附けたに過ぎぬ。

然しこの組合がこれから先、どういふ風な經路をとつて發展するか、非常に興味のある問題である。種々多樣な變化を重ねつゝ複雜な歷史を編んでゆくに違ひない。

然し、西郊共働社は西郊共働社で、世界中の何處にもない個性と形態とを持つて、成長し發展してゆく事を輝やかしい氣持ちで私は期待したい。

——荻原みや子——

病みてなほ革命を叫ぶ吾が友の癒えざるまゝに三年は往ぬ、

マルクスの肖像を俺の先祖よと病床に友は今日も語れる、

何事もなさゞるまゝにまた一つ年重ね來て二十二才吾は、

吾性の弱きが悲し思ふこと人に語らぬことの多かり、

こんな言云へば喜ぶかなど思ひ文書く心吾はもつなり、

寢入られず細き灯に瞳をさけつ貧しき歌の二つ三つうかぶ、

春

小川未明

小山は、なだらかに平野に向つて、裾を擴げてゐる。山の雜木は淺緑をして、急しさうに吹く風に動いてゐるが、空に日が輝いてゐるので、その一片、一片が、エナメルのやうに閃めく。それ等の中にまじつて、一本の空木が、淡紅色の花をつゝましやかに咲いてゐる。田舍娘が、よく町に祭のある日に出る時にさしてゐる簪のやうに、哀れ深きを感じさせる。どこからか飛んで來た、頰白が、その花の咲く枝の頂きに止つて、思ひきり、敏捷な頸を、青い、青い、晴れた空に伸ばして、あたりの景色を眺めるやうに見廻はしながら、朗らかな聲で、歌ひはじめる。

私は、故郷のこの山の景色を忘れることができませんでした。彼方には、春になつてから、紺青の深くなつた、日本海が、見えてゐました。

「お前は、誰に向つて、その唱を歌ひ聞かせるのだ！」

頰白に向つて、靜かに、花の咲いた木の方へ歩み寄りながら言はざるを得なかつた。

しかし、この時、麓の街道には、旅人が、町の方へ、また、反對に濱邊の方へ、思ひ〳〵に、長閑かに陽炎の上る、田圃を右左に望みながら歩いてゐた。そこには、昔からの寺もあれば、道しるべの石碑なども建つてゐて、桃や、櫻の花が、いつしよに咲いてゐる僻村は、貧しいながらに春の自然に裹まれてゐたのでした。

私は、歸つて、忘れることのできない、この田舍の景色を見たいと思つた。都が、しきりに花の便りで賑つてゐた時、獨り、北へ行く、汽車に乘つて、さま〴〵な空想に耽つてゐた。

あちらを見ると眼の走るかぎり山脈がある。それを越えれば、何處であらう？　山の奥にも山があり、また村がある。そこで、そこに行けば、どこにも見る同じやうな、人間の生活が繰り返されてゐるのであらう。しかし、いま見るあの高い山々の姿は、何といふさびしいことであらうか。雪が、南方から、射し照らす、太陽に輝いてゐる。そして、そこには、まだ春が來ない。美しい、高山植物の花は、あの雪が、半ば解けなければ咲かないのだ。

黒土を破つて、生々と、肥料のよくきいた、麥の伸びた畑に、眼を轉ずると蝶も飛ばなければ、もとより、蜻蛉の影の見えやう筈もなく、たゞ風のみが光つてゐる。

ふと、私は、すぐ自分の前に、十四五の少女が腰をかけてゐて、同じやうに、窓の硝子を透して、外の景色に見とれてゐるのを見ました。その刹那、何といふ、青い、やつれた顔だらう？　と私は、言ひ知れぬ悲しみを彼女の顔の上に覺えたのです。

『どこまで、行くの？』

私は、かう言つて、たづねる氣持になつた。少女は、やさしい、性質らしい。此方に、眼を向けてにつこりと微笑みながら、

『蒲原です。新潟から、少し、田舍へはいるのです。』と、答へた。

『どこへ行つてゐたの？』

『モスリン工場へ行つてゐたんですが、病氣になつたから……。』と、少女は、言ひ終らずにさびしく笑つた。唇のまはりには、褪せた花辨のやうに、血の氣が失せてしまつた。

私は、聞くまでもなく、すべてを悟つたのであつたが、さらに問はざるを得なかつたのです。

『どこが惡くて。』

『肋膜です。』

『お父さんや、お母さんは、何をしてゐるの……』

『お母さんはないのです。お父さんと兄さんは、百姓をしてゐます。』

『癒つたら、また、東京へ出るつもり?』

『えゝ。』彼女は、また、さびしさうに、うなづいて見せた。

私は、默つてしまつた。いつになつたら、彼女が、曾てこの道を汽車で、行つた時のやうに、活々として、元氣よく通ることができよう。

村から、いつしよに町の小學校へ通つた友達の、半途で學校を退いて、東京へ奉公にやらされる時分に、何も知らなかつた私は、子供心に、却つて、それを羨んだものであつた。そして、それぎり、私達は、永久に相遇ふやうな機會はなかつた。……男に、女に。かうして、知られずに、村々では、幾人死んで行つたであらう。

都會が、農村を搾取するなどと說くよりか、幾何の小供達の血を工場が吸取つたといつた方が分るのだ…… 私は、悲痛な眼を彼女自身の運命すら知らずに、外の、轉々として變りつゝあつた景色に見とれてゐる少女の顏に向けて、またそらさゞるを得なかつたのでした。

田舍へ歸るといふことは、さういふやうな幾つかの悲劇を、さらに新しく知ることより他に何もないやうに感じられたのである。平和な春の日の光に惠まれてゐると思つた村に、人知れず浸々として怖しい病毒が、流れ込むと思ふだけでも、私の身の毛は竦つたのでした。

——二、二作——

編輯室にて

私は今年になつてから、幾人かの人から『あなたは今年はいゝ年ですよ、運が開けますよ』と云はれた。そして云はれる度びに私は嬉しかつた。『今年と云つても一體いつ頃から？』と聞くと、中の幾人かは符牒を合はせたやうに三月から、と云ふのであつた。私は正月を迎へる頃から三月が待ち遠しかつた。

今、いよ〳〵三月號の編輯の結びをつけるにあたつて、私は何がなしに非常に嬉しく、三月よ、早う來いと思つてゐる。

——と、かう云つたら私はみんなから嗤はれるであらうか。もちろん、こんな事は或ひは何でもない事なのかも知れない。何かのものゝ本に、たゞそんな事が書いてあるだけの事かも知れない。然しかうして私を喜ばせ、私に快い元氣を與へてくれて働かせてゐる力は一體どこから來るのであらう。

まあ、そんな七面倒なセンサクはどつちでもいゝ。何れにしろ、三月よ、早よう來いだ。

ある所で偶然この『婦人運動』を讀んでぜひあなたに會ひ度くなつてやつて來た、と云つて私をたづれて下さつた方が今年に入つてから四人ある。手紙を下さつた方も四人ある。私はことしになつてから、それだけでも、いゝお友達を八人多く惠まれたわけである。新しく購讀者になつて下さつた方を加へるとすると、ずつと數は澤山になるわけである。

ありふれた所謂婦人雜誌とはちがつて、これだけの特色を持つ『婦人運動』である。この『婦人運動』が現在もつてゐるところの特色を通してつながりあつてゐる讀者と編輯者との共感と云はうか、共鳴といはうかとにかくこのつながりは、これは可なりな大きな力であると私は思ふ。たゞに私にとつて、又讀者にとつて力であるばかりでない、社會的にみても、婦人として大きな力であると、私は確信をもつてさう云へる。

私はこの雜誌をもつと〳〵育て上げてゆかなければならぬ。どうぞ力をかして下さい。（む）

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部　貳拾五錢（郵税五厘）
半年分　壹圓四拾錢
壹年分　貳圓八拾錢

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和二年二月廿五日納本
昭和二年三月一日發行

東京市外中野町圍三二四四
發行編輯兼印刷者　奥むめお
東京市小石川區西古川町二五
印刷所　中外印刷株式會社
東京市芝區愛宕下町二ノ三
發行所　職業婦人社
振替東京六四一六〇番

社會問題叢書 第十篇 中澤辨次郎著

資本主義と農村問題

四六判二百十頁
上製函入
定價一圓八十錢
送料八錢

農村問題、小作問題は、今日の最も重大なる問題であつて、また今後ます〱重大となり行く問題である。この問題の解決を外にして日本の國礎を永遠の安きに置くことは出來ない。而も此の問題を根本的に解決する爲には、現在の資本主義制度の如何なるものなるかを知り、之との關係を究明することが必要である。著者は多年農村問題の研究に沒頭すると共に今やまた農民運動一方の闘將である。本書は著者がその蘊蓄を傾けて平明懇切に此の問題の根本義を說き、之が解決の道を指示す。農民は固より都人士も亦必讀を要する書である。

社會問題叢書

第一篇 現代社會生活の不安と疑問 堺利彦著
第二篇 勞農露西亞の勞働 山川均著
第三篇 日本勞働運動發達史 赤松克麿著
第四篇 無産階級の世界史 上田茂樹著
第五篇 産兒制限の理論と實際 安部磯雄著
第六篇 資本主義と戰爭 松下芳男著
第七篇 自由戀愛と社會主義 守田有秋著
第八篇 婦人問題と婦人運動 山川菊榮著
第九篇 インタナショナル發達史 淺野研眞著

各册定價壹圓（送料八錢）

東京市小石川區小日向臺町二ノ一九 文化學會出版部 振替東京七二八〇番

解放群書

(13)

解放社編

柳瀨正夢裝幀

定價壹圓
送代拾錢

社會運動團體現勢年鑑

昭和二年度

年鑑の走り

昭和二年一月元日現在の勞働組合、農民組合、水平社、無產政黨、思想團體其他一切の社會運動團體の現勢現狀（本部支部員數役員宣言綱領規約團歌團風特色機關誌其他）報告を細大洩さず集錄し、之れに各方面諸權威の勞働農民水平政黨婦人文藝社會其他に對する昭和元年度大觀を加へ附するに各團體並に同雜誌の名簿を以てしたる最新最詳最確最便最廉菊版二百五十頁の大年鑑。

東京芝區新櫻田町十九
解放及解放群書發行所

解放社

振替東京三六九四四番
電話は銀座二〇七七番

大正十三年十一月二十二日　第三種郵便物認可
昭和二年二月廿八日　印刷納本
昭和二年三月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第五卷　第三號

（定價二十五錢）



春の訪づれ

早くもきざす春のひかり、緋桃白桃咲き匂ふ長閑さは先づ髙島屋に訪づれて來ました。春淺き頃の御衣裳嶄新な流行品は各階に滿ちみちてまゐりました。花にさきがけて先づ暖かい髙島屋へ

大阪

髙島屋